

2017
No. 640

広報 あいづばんげ12



夢も希望もジャンボに育て！

「農福連携」 若手認定農業者×障がい者作業所の新たな農業。

目次-CONTENTS-

各課からのお知らせ	4～12
まちの話題	13～16
図書室だより・町史編さん調査余話(6)	17
ばんげのいいとこみつけた・12月の加ガ-	18
お知らせ information	19～21
こどもと健康の広場	22～23
ばんげの味が育てるおいしい楽しい健やかライフ	24

夢も希望もジャンボに育て！

会津坂下町の若手認定農業者団体から始まった、障がい者と互いに手を取り合う新しい農業の形をお伝えします。

—ジャンボニンニクとジャンボ落花生の栽培加工—

農福
連携



**最初は町の新しい特産品を
作りたい思いだけだった。**

若手認定農業者の猪俣正彦さんは会津では誰も取り組んでいない農産物を特産品にしたいと考え、人の手の平ほどもあるジャンボニンニクの少量栽培を始めました。会津の気候に合い、開始から数年で上手く収穫することができたそうです。2～3年前から販売先を開拓できたことをきっかけに、栽培面積の拡大を会津坂下町認定農業者会青年部のメンバーに持ちかけ、「未来工房こぼる」が立ち上がりました。「立ち上げ当初は障がい者作業所をパートナーとして一緒に農業をすることになるとは思ってもいませんでした。」
(猪俣さん 談)

面積拡大！でも、人出が足りない…。

面積拡大にはある課題が。それはメンバー全員が米や野菜、果物農家であるため、繁忙期は自分の田畑の作業で手一杯にな

り、ジャンボニンニクの作業に日程が割けないことでした。

未来工房こぼるの代表、新國竜太郎さんは所属している認定農業者会事務局に働き手がいないものか相談しました。

そこで出会った農福連携。

「その時事務局から障がい者作業所と雇用関係を結ぶ『農福連携』を試してみたらどうかと提案を受けて、町内の2つの作業所(※)に取り次いでもらいました。」(新國さん談)

2つの障がい者作業所は、年間を通して安定的に作業があるわけではない事に不安を抱えていました。そこで認定農業者事務局・町の福祉担当者を交え、「未来工房こぼる、障がい者作業所どちらにも利益が生まれる形」を模索しました。

(※) ゆうゆうハウス

自立サポーターセンター桜

● 各種作業など引き受け

たまに外で体を動かすのも良いです。
毎日はキツイですけど（笑）



半日で約1,000個ほどを収穫



出荷のための葉切り作業



ゆで落花生

風味豊か。程よいしょっぱさがお酒によく合う。



作業の打ち合わせと休憩はわきあいあいと



みんなで分担して効率的に作業をすすめる



ガリ塩

パスタや炒め物の簡単スパイス。

臭みはほとんどなく、ニンニク本来の味を楽しめるのが特徴

原寸大ジャンボニンニク



もう一つの農福連携。ジャンボ落花生も特産品！
ジャンボニンニクでの農福連携が軌道に乗り、新たに若手認定農業者の有志団体「會津ミライノ」が立ち上がりました。農福連携方式でジャンボ落花生の栽培に取り組んでいます。また、収穫した落花生加工（茹でる、パッケージへの封入）も障がい者作業所「ゆうゆうハウス」に委託するなど、連携の幅も広がっています。

連携することで生まれる互いのメリット。

定植、草むしり、収穫など年に4〜5回程作業が行われます。種植え・収穫した作物の土払い、販売用に皮をむき葉切りして整えることなどの主な作業を作業所メンバーが担当し、トラクターの操作などをこぼるのメンバーが行います。この業務分担により仕事効率は各段にあがり、ここぼるでは作業日数の短縮、作業所では高い賃金を得るのに加え、外で体を動かすことで作業所員の健康づくりの一助となるというメリットを生んでいます。

本当の「農福連携」を目指して。

「僕らは、彼らの高い作業力を必要としているし、頼りにもしています。だからこそ、作ったものをきちんと売って収入にしていける。福祉の部分だけではない、本当の「農福連携」を続けていきたい。その上で、賃金向上も目指していきたい。」（新國さん談）その言葉通り、メンバーたちは福島市や東京都の物産館などで、自らで作り上げた農作物を売り切っています。

現在は来年の収穫に向けてジャンボニンニクの定植（植え付け）を行ったところ。互いのメリットを最大限に引き出す「農福連携」で新たな形の農業が始まっています。

未来工房ここぼる

ジャンボニンニク栽培・販売
ガリ塩（加工品）は道の駅で販売中！

會津ミライノ

ジャンボ落花生栽培・販売
茹で落花生は道の駅で販売中！

農福連携ご相談ください！

会津坂下町認定農業者会事務局
産業課 農林振興班内
☎ 84-1505